

第7回トリエンナーレ学校

「ヨコトリ 2011 見どころ講座アーティスト編①」

講師： 天野太郎（ヨコハマトリエンナーレ 2011 キュレトリアル・チーム・ヘッド／横浜美術館主席学芸員）

天野：初めてお会いする方もいらっしゃると思いますが、私はそもそも横浜美術館の学芸員をしています。2001、2005、2008 と、4 回目のトリエンナーレでようやく美術館が会場になったということもありまして、その事務局は美術館の中に置いてあります。一つは市民協働でサポーター事務局の事務局長をやっています。もう一つは今、展覧会を仕立て上げないといけなので、わかりやすく言うとその現場監督みたいなものです。ディレクターが作家を選んで、その作家と具体的な話を打ち合わせすることをまとめる役割をしています。

実を言うと、ちょっと板ばさみのような仕事です。どうしてかと言うと、市民協働の立場から言うと、このあいの記者発表の時、3 月 11 日はちょうど地震が来た日で、横浜美術館で午前中に記者発表をして、さあ東京に乗り込んで行ってはじめてようかと思った 15 分くらい前に、有楽町駅の前の電気ビルディングという所の 20 階に、外国人特派員協会があって、そこを借り切ってやろうとしていたところにあの地震が来ました。受付ももう始まっていたので 60 人ぐらいい集まっていた。ものすごかったです、やはり。そのときに発表されたアーティスト以外にも、どんどん決まっています。その決まっている作家もお伝えしたいわけですが、なにせ記者発表がまだ終わってないので言えません。市民協働的に言うと、ここでいろいろなプログラムがあるという部分を言いたいところなのですが、それを言えないところがちょっとつらいなと思います。

【ベルリンの美術環境について】

4 月 5 日から、昨日ベルリンを発って今日（4 月 13 日）日本に着いたのですが、ロンドンとベルリンで何人かアーティストに会ってきました。それで美術館の学芸員がなにかグループ展をやりたいとか、いろいろなアーティストに会いたいときに、ベルリンほど便利な場所はありません。今、日本のアーティストだけでも 50 組以上います。海外もほとんどの世界中のアーティストが大体ベルリンに住んでいます。一つはパリやロンドンに比べれば物価が安いということもあります。非常に住みやすいですし、それからスタジオというか家を借りるのもそんなに高くありません。いくつか私も見てきましたが、いわゆるアートをする人にとっては非常に環境の整ったところ。何よりも、実は首都でありながら、そんなにばたばたしていません。割とのんびりして。ロンドンとかニューヨークみたいにせわしくないです。だから、そういうふうなこともあるのかな、とも思います。今回会ったアーティストも、国で言うと例えばスウェーデンとか、それから直接は会えませんがインドの人とか、とにかくドイツのアーティストというのは一人だけです。他はいろいろな国の人に会えました。その話はまた後で少しお話しします。

【ヨコハマトリエンナーレ 2011 の構想】

アーティスト編という事で、実際のところ、4 月以降になると少しずつ来はじめます。下見に来たりするアーティストからの直接のレクチャーも考えてはいますが、私の話とかあるいは他の担当の話とかもお聞きいただきたいと思います。これは別に学校の講座ではないので、講座を聞いてはいおしまいという事ではありません。

実は何を目論んでいるのかというと、いまのところ、まだ具体的にプログラムはできていませんが、トリエンナーレの、主会場といわれているのが横浜美術館と BankART です。その横浜美術館と BankART に、ビクターセンターを設けて、いろいろな方が、美術をよく知っている方、今回初めてトリエンナーレを見に来たという方もいらっしゃると思いますが、そういう方にご案内します。つまりインフォメーションです。例えばトリエンナーレの中身だけではなくて、これはもうすでにサポーターの皆さんと始めている、街の案内、横浜の紹介なんかも含めた情報提供なども考えています。

例えば、個人で来られても、団体で来られても、そういう方にみなさんから一種の解説をしてもらおうと思っています。みなさんが2会場を見て、あるいは展示をされている作品とか、あるいはこれからアーティストにも会う機会はあると思います。今 60 数名を予定していますが、その全部を覚えて、説明していたのでは何時間あっても足りません。ですから、その説明をするときに、要するに皆さんが非常に気に入った作品を、例えばレストランに行って、お宅の一番おいしいもの何ですかと聞くと、大体全部って言いますが、そうではなく、自分にとっての見どころ、自分にとって非常に面白かったもの、これは是非見てほしいというものを、最初のトリエンナーレとは何かという解説に加えてしていただきたいと思っています。それについてはわれわれの話を聞いただけでは、人に伝えるところまではいきませんので、その辺は皆さんもしっかり作品を見てもらうとか、あるいは、場合によってはアーティストに話を聞く、という機会を経た上で、会期中にそういうことをしたいなと思っています。とにかくその作品だけを見逃さないでくださいね、ということでも構わないと思います。それを実は目論んでおりますので、今日はその意味では、総論ですから今日の話聞いたからといって、じゃあさっそくやろうか、というわけにはいきませんので、そのような機会を少しずつ増やしていこうと思っています。もちろんこういうことに興味のない方もいらっしゃるし、むしろあまり人の前でしゃべるのは苦手だという方は、他にもヨコトリ宣伝チームがいろいろな活動をしていますので、そのプログラムに参加していただいても構わないです。一つそういうことは伝えたいと思われる方は、そういうチームに入ってもらえればよいと思います。

とかくわれわれ学芸員は解説を美術館でやると、難しくてよくわかんないと言われるのですが、そういう話ではなく、自分で本当に感じたことを人に伝えていただいて、それだけでも見て帰ってもらうことがどんなに楽しいか、意味があるかということをしていただければと思っています。実はこれが一番難しいです。わかりやすく伝えるということは実は難しいです。ただ、それで伝わったときの、これも一つの醍醐味だと思いますが、あなたの話がすごく面白かったので実際に作品を見て楽しかった、というようなことを言ってもらって帰ってもらうというのが、非常にいいかなと思っています。そういうことを念頭に入れていただいて、つまりアーティスト編と銘打っている講座と言うのは、少しずつそういうものにシフトしていきますので、そうご理解いただければと思います。

何度も言うように講座ではないので一方通行で話を聞いてメモをとって帰って行くのではなくて、それをさらにご自分の心のなかで再生産をしてもらって、場合によってはちょっと一回やってもらってみんなで批評します。それではよく伝わらない、というふうなこともやるかもしれません。そうでないと、ひとりよがりになってしまうのは良くありません。いずれにしてもいろいろな段階を経てプログラムを持とうと思っていますので、よくご理解いただければと思います。

【横浜市の文化政策の取り組み】

今日の話は、トリエンナーレってなんですかというところを説明するためには、ここを押さえておかないとよくわからなくなるので、もう一度復習という意味で考えていただければと思っています。みなさんにお配りしたなかで、このクリエイティブ・シティ横浜。文化芸術創造都市という横浜の概要が書かれています。背景と主旨という事で、要するに横浜市が2004年に、このクリエイティブ・シティ、日本語に訳すと創造都市ということになります。横浜がそういう都市として、文化とか芸術の創造都市ということを経験して街づくりをしていこうという、いわば政策です。特に、ナショナルアートパーク構想というのが書かれています。それから創造界隈の形成というところで、BankARTが代表的な例ですけれども、いろいろな拠点が生まれる。あるいはクリエイターです。簡単にアーティストではなくて、例えば建築家とか、デザイナーとか、デザイナーもグラフィックデザイナーもあればファッションデザイナーもあると思いますけれども、いずれにしてもそのようなクリエイターの人たちを、できるだけ横浜に呼んで、横浜で活動を展開してもらおうということをする。それから映像文化都市ということも念頭に入れました。それから創造の担い手、つまり若い人も育てていこうということです。

そもそもこれはどういうところから発想されたかという、実はイギリスが最初です。こういう考え方というのは、文化や芸術というのは、すぐには世の中の役には立ちません。大体世の中が厳しくなるとすぐに切られるのが文化、芸術です。私が出張に行っていたロンドンも、ものすごい文化予算がカットされて、それは日本どころの騒ぎではないくらい大変です。みなさんもご存知のように大学の授業料が倍になりました。たしか、60万か70万ですけども、今は120万くらい取られます。これは、たまたま居たので行ってきましたが、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスという、経済とか社会学などで結構有名な大学があります。そこは年間の授業料は200万から250万くらいです。ただすごいのは、歩いていると、キャンパスはなく街のなかのビルが大学になっているのですが、そこかしこに新聞のスタンドが置いてあって、ウォール・ストリート・ジャーナルとニューヨーク・タイムズとその他、主要三誌が、ニューヨーク・タイムズなんて太いですけれど、全部無料で置いてあります。学生はそれを無料で読むことができます。企業がそこから育つ学生のために投資をしているわけです。ところが、残念ながら文化のほうは非常に厳しい状態にあります。しかし、いずれにしても文化にすべてをシフトしていこうという行為は、これは長くなるので雑駁な説明になりますが、もはや大量に生産して大量に消費をする時代ではなくなって、非常に情報が重要な時代になっているというのが一番大きいです。情報文化をつかさどるような文化とか芸術を、国あるいは街の政策にシフトしていくというのは、実はイギリスから出たとは言えるものの、今いろいろな国で始まっているところなんです。そういうことが実は背景にあります。

このナショナルアートパーク構想もそうですし、3年に1回ということは毎年やるわけではありませんが、このクリエイティブ・シティ横浜のいろいろな活動を、リードしていくことがトリエンナーレの役割なのです。ですから逆に言うと、毎年、毎日積み重ねられているようないろいろな活動が結んでいって、3年に1回のトリエンナーレが実現していくということになります。だから他と何の関係もなく始まるのではなく、あくまでも継続した活動の中で行われるというのがこのトリエンナーレなのです。ですからBankARTも黄金町バザールもそうですし、それからいま市内だけではなくて、いわゆる郊外でも展開されているような活動も含めて、大きなフレームのなかで考えますが、そのなかの一つのメインイベント、いわばそれを集大成していくということがトリエンナーレの求められていることになります。

ただ具体的に言うと、前回の 2008 年でみなさん記憶に新しいとは思いますが、パフォーミング・アーツなども入ってきています。最近はいわゆるファインアートだけではなくてパフォーミング・アーツや、あるいはいわゆる美術的な映像以外の映像も入ってきていますから、そういう意味では、非常にクロスオーバーをしてきているので、単に美術だけではありませんが、しかしどちらかというと美術の傾向が強いです。ですから、トリエンナーレとは別に映像のイベントを時々やってみる、というようなことは今後も考えられます。あるいはパフォーミング・アーツだけに特化したものが今後行われるかもしれません。

しかし、いずれにしても総合的な文化のイベントという言い方はやや抵抗がありますが、大規模な、今までの横浜の蓄積してきたような様々な文化的な情報だとかそういうものを駆使したなかで実現していくというのがトリエンナーレである、というところが重要なところだと思います。おそらく昨年始まったあいちトリエンナーレも継続するとなると、あいちはあいちで3年に1回まで何もしないのではなく、その間にいろいろ継続した活動が行われると思います。その一つのモデルになろうとしているわけです。最初は 2001 年ですから、実は 10 年たっています。10 年たっているということは、6 歳とか 7 歳くらいに見に来た人がもう高校生かひょっとしたら大学生くらいになっているという人もいるわけです。つまり、子どものときに見た経験が、自分がその後の生きる指針になっていくような人も、実は何人か私も知っています。実は美大に行ってしまったりとか、美術をやることになりましたという方も何人か出てきているわけです。それは、私は一つの成果だと思います。そういうふうにして継続をしていくなかでいろいろな形で、すぐには見えない成果みたいなものが、しかし徐々に実を結んでいくということがあるかもしれません。

特に今回は「みる、そだてる、つなげる」という事で、もちろんそのクリエイティブ・シティとして宣言をしている、その文化・芸術創造都市にうたわれている中でのエッセンスはすでに入っています。実際に作品を見ること、これはアートであるということが一つ前提ではありますけれども、しかしその中で人を育てていく、あるいは様々な交流の中で人と人、組織と組織を繋げていく、あるいは街と街が繋がっていくということ、特にキーワードにしております。

【横浜トリエンナーレ組織委員会の変化】

皆さん一応当事者みたいなものですから、最初に確認しておきます。横浜トリエンナーレは日本で初の国際的なトリエンナーレとして、独立行政法人の国際交流基金と、横浜市とそれから NHK、朝日新聞の 4 社からなって、それが組織委員会を作っています。2001 年に開催された第 1 回と、2005 年、3 年に 1 回ではなく、実は事情があって 1 年延びました。そして 2008 年。過去 3 回についてはその組織でやっていました。独立行政法人の国際交流基金は、簡単に言うと、日本語あるいは日本の文化を海外に普及することが仕事です。しかし、政権が変わって民主党になったときに事業仕分けがあり、インターナショナルな事業とはいうものの、国内で行うようなものについては事業費から外れてしまいました。ですから今は国際交流基金が一つ抜けました。これは関係者にとってはずいぶん大きな話です。というのは実は横浜市と国際交流基金がほぼ予算をフィフティ・フィフティでもっていたわけです。その予算のありどころが一つなくなってしまったという結構大きい話です。そういう意味では、片羽飛行で飛んでいくかどうかということではずいぶん、実は去年、4 回目のトリエンナーレをするかしないか、ずいぶん時間がかかりました。国際交流基金の仕分けというの、テレビでも、国際交流基金だけではなく、いろいろな仕分けがあったとは思いますが、実はそれで少し遅れました。ですか

ら、継続することがようやく決まったのが8月15日の市長会見です。その時点ですでにもう1年ぐらいしかありませんでした。それで文化庁が国の機関である国際交流基金に代わって、協働していこうということになっています。

【ディレクターとキュレーターの役割】

次は数字的な話です。ずいぶん具体的な、予算や総入場者がどれだけ来たというようなことです。会場も1回目、2回目、3回目もずいぶんいろいろなところでありました。赤レンガは、1回目と3回目です。それから新港ピアは新しく3回目から登場しました。要するにこの中で横浜美術館が全くなかったのですが、ようやく4回目以降、おそらくもう固定した形で、美術館だけは会場の一つとして、それ以外の会場はいろいろ変わるかも知れませんが、大きく決定したところです。

このディレクター、キュレーターというのは何なのか。例えば、1回目はアーティスティック・ディレクターが4人いました。そして、キュレーターはいません。これは4人の方が事実上、ディレクションしながらキュレーター、つまり具体的に自分でアーティストを選んで、交渉もしていくような仕事を担ったことを意味しています。

それから2回目は総合ディレクターと名前が変わっています。英語で言うとディレクター・イン・ゼネラルです。川俣正さんというアーティストが全体の理念を決め、流れを決めるわけです。もちろんその川俣さん自身もアーティストを選びますが、そのディレクターの考えに従って3人が、このときは私もやりましたが、いろいろこの地区を頼むという指令が来て、それに従ってアーティストを選んでいきます。例えば、山野真悟と書いてありますが、今市民協働で一緒にしていますけれど、山野さんはどちらかというとアジアを中心にやってくれとか、私はヨーロッパとか中近東とかアフリカとかそういうのを中心に集めてくれ、作家と会ってくれというのがくるわけです。そういうのをやっていました。そういう関係です。ディレクターというのは要するに広い枠組みを作っていくって、その枠組みにしたがってそのキュレーターというのが実際にアーティストに接触していくわけです。

4回目は、この総合ディレクターが逢坂恵理子、つまり横浜美術館の館長でもあります、逢坂恵理子が全体のフレームを作って、このアーティスティック・ディレクターのところに三木あき子さんがいらっちゃって、三木さんがアーティストをすべて決めていくわけです。それで私はさっきわかりやすく現場監督と言いました。いろいろ決まっていたアーティストを、では具体的にどんなふうにして作品を輸送しようか、そもそも場所に入るだろうかということをするチームがありますが、そのチームを束ねる役割をしています。最近キュレーターという言葉も少しずつ人口に膾炙して、『キュレーションの時代』という本が出ているくらいです。新しい言葉ではありますが、要するにアーティストを決めて、どこに展示をして、どういうふうに見せていくかというところまで責任をもって行うというのが、キュレーターの仕事です。だから最後まで、皆さんが実際展覧会を見に行かれる、見えているところについて、こと細かく指示をしてどういうふうにしてプレゼンテーションしていこうとか、インスタレーションしていこうかというところの仕事をするのがキュレーターの基本的な仕事です。

【過去の横浜トリエンナーレ】

1 回目が「メガウェイブー新たな総合に向けてー」というテーマです。若い人は10年前というと中学生くらいかもしれないので、見られてなかったりするかもしれないです。私はこのとき美術館で奈良美智の個展を自分でやっていましたが、ほぼ同じ時期で、お互いに相乗効果があって9万人以上の方が展覧会に来てくれました。ただやはり、どうしても美術館とすると連携しているようでしていない感じがありました。たまたま現代美術の展覧会を、トリエンナーレのときに同時に体制ができましたが、なかなかその後、うまくいきませんでした。

これはインターコンチネンタル・ホテルのところに展示をしていたパッタです。これはたぶんあじさいです。これは草間さんの作品ですね。そしてこれは、イチハラさんの《恋する美術だ。》です。あのテキストそのものが作品の作品です。これは島袋さんです。島袋道浩さんの、港をテーマにした作品だったと記憶しています。それからこれはマリナ・アブラモヴィッチさんの作品です。これは、フェリックス・ゴンザレス＝トレスという、このときすでに亡くなっていたと思いますが、手前のキャンディの作品、みんながキャンディを持っていくというものです。これが、ジュン・グエン＝ハツシバの作品です。ああそういえば思い出された方もいらっしゃるかもしれません。これは束芋ですね。横浜美術館でも個展をしました。

2005 年は横浜の埠頭の所の大きな倉庫 2 ヶ所だけでやりました。中華街でも展示をしましたが、分散型ではなくて会場を集中させました。このとき実は、実際にスタートしたのは2005年の2月でした。9月23日だったと思いますけれども、1年ない状態で準備をしたということもありました。

これはダニエル・ビュランの作品です。これも港に行くまでのところだったので行かれた方は否応なく目に入ってくるので記憶に強かった作品ではないかと思います。それから、これは分散型というより、ちょっと会場に向かうアプローチのところに象徴的な作品をというところで、ルック・デルーの作品です。これはちょうどコンテナが山積みしてあるような埠頭のところだったので、コンテナを使った作品です。これはロビン・ロードという南アフリカのアーティストです。これは堀尾貞治と、彼と一緒にやっている「空気」というグループの毎日ワークショップ、作品制作と言っているかもしれません。本当に会期中毎日やっていました。

どちらかというとも2005年というのは割りと、いわゆる美術館とか画廊みたいなところで白い壁にペンキをしてという作品ではないものが多かったです。場所が場所的にそのようなスペースを確保できなかったということがあります。これがあいちトリエンナーレでもやっている西野達郎さんの作品で、中華街に行くとこれ自身はまだ中華街に残っています。これを使って周りを建物のようにインフラを作ってホテルにしました。一組しか泊まれません。この回は2箇所集中しましたが、いくつかのところ、例えば先ほどの公園だとかあるいは中華街などの周りの地域にちょっと乗り込んでということもありましたが、広範囲に分散したわけではありませんでした。

そして「タイム・クレヴァス」です。これはポーランドの作家です。この2008は見られた方はだいぶ多いと、これこそが記憶に新しいだろうとは思いますが。場所も新港ピアとってかなり大きなスペースも使いましたし、それから三溪園もありました。

これはランドマークタワーです。あそこにあった「落っこちたら受け止めて」というまさに少年が下のほうに飛び込もうとしている作品です。それから BankART も会場になりました。これは新港ピアの作品ですけれども、ミケランジェロ・ピストレットの作品。これは新港埠頭です。そしてこれは中西夏之さん。これは BankART で展示をしました。ですからこれは割りとフレームとしては大規模な展覧会だったのではないかと思います。

会場もずいぶん多かったです。

こんなことを言うとあれですが、ここまでなかなか予算が確保できないということもあって、2011の4回目は、総合ディレクターの逢坂のほうからも何度か話があったので、すでにお聞きいただいているとは思いますが、組織そのものが再編されたということ、それから美術館というところが会場になったということ、単に予算が少なくなったということだけではなく、これからトリエンナーレやビエンナーレというような国際的な美術展が、社会の中でどういうふうな位置づけになっていくのだろうということが事実上、問い直されています。

しかも、これは本当に幸か不幸か、3月11日の地震があって、そもそもこういう催しを存続していくべきかどうかという根本的な議論にもなりました。これについては市長のほうでアナウンスがあって、継続をするし、それから延期もしない、予定通りに8月6日をめざすという方向で進んでいます。ただ、誰一人これから一体どうなるのかわかりません。いつどんな停電が起きるかわからない。しかしそれとは別に、文化の持っている力を再認識する、逆に言うと、問い正されるかもしれないということも含めて言うと、位置づけも含めて今までの3回とは少し毛色の変った内容になると思います。

3回目の2008年の時にはチェルフィッチュのパフォーミング・アーツも含めて、舞台の作品なんかもトリエンナーレの中の参加アーティストとして加わっていきたいということでした。これは第1回と比べるとずいぶん傾向が変わった感じがします。これは大巻さんのシャボン玉の装置ですけど、これをいろいろなところに場所を移動させて展示をしていくということでした。必ずしも固定した場所で展示をするというものではない作品です。

【ヨコハマトリエンナーレ2011の動き】

そして今回ですけれども、横浜美術館と2会場、その周辺地域についての調整をしているところですが、8月6日から11月6日まで予定通り進めるということになっています。これは例えば、本当に何がおきるかわからないということで、作品を海外から運ぶときというのはエア・カーゴという飛行便で運んだり、あるいは時間的に余裕があれば船で運びます。ただその船も、まだしっかりとした情報ではありませんが、海外の貨物船の航路が変更されるのではないかという話があって、それが実際どうかは別にしても、何が起きるかわからないということがあります。

しかし、環境がそのように変化することによって、それに対応していくということが迫られるかもしれません。それはわれわれもそうですが、アーティストのほうも同じようにこの環境をすでに認識しています。むしろ、例えば私がずっと出張に行っているとき、会いに行ったアーティストが必ず今日地震あったとか、今日こうなっているということは彼らのほうがよく知っているわけです。日本で何があったかというのは、最近の震度6の地震のときも非常によく情報を得て、しかもそれを教えてくれるぐらいでした。そういう状況で何をしなくてはいけないのかっていうのはアーティストのほうもよくわかっていると思っています。だから単純に与えられた作品を展示して、はいおしまい、ということではなく、それが一体何を意味していくのかということ、やはりお互いに考えていかなければいけないということだと思います。それから冒頭に話した、みなさんをお願いしたい、私が非常に気に入っているこの作品と言うときも、そういう文脈で位置づけていくということは、当然あるだろうと思います。

ですから、最終的には美術というのが何かしらの形で、作っていく、救済していくというところに、少しでも役立つ、寄与していくということが、何らかの形であればいいだろうと思います。これからいろいろなことが起きたときにそれに対応していくということが求められていくという意味でも、過去の3回とはずいぶん趣が違うと思います。やはりこういう状況になったとき、大きく派手に宣伝だ、広報だというのがなかなか打ちにくい中で言うと、まさに市民協働で今展開しているような、たとえ横浜市のローカルであったとしても、草の根的な宣伝活動というのが逆に非常に重要になってくると思います。われわれもそういう認識に立っています。ですから、今後の活動の流れ、アーティストの紹介はするとともに、宣伝チーム、おもてなしチームという名前で位置づけている活動が、より重要な内容になってくるだろうと思っていますので、その辺もご理解いただければと思います。

【ヨコハマトリエンナーレ 2011 参加アーティストの紹介】

それでは 2011 のアーティストです。これはもうみなさんチラシがあるので、写真の図版で見られた方もいらっしゃると思いますが、これはウーゴ・ロンディノーネという、最初の表紙になっている作家の、もう一つの《OUR MAGIC HOUR》という展覧会のタイトルにもなっている作品です。それから実際にウーゴ・ロンディノーネの作品というのは、これはまだ確定はしていませんけれども、美術館の中ではなく外で展示をされるだろうと予定されています。この人の作品は、形もどちらかというわかりやすいというか、子どもが喜びそうな、漫画によく出てきそうですが、実は 12 の月を表していたりします。例えば神話、われわれにとってなじみのない神話、ギリシャ神話とかかもしれません。そういうお互いがそれぞれの持っている文化の割と基礎の部分、遺伝子に組み込まれているといってもいいようなもの、そういうストーリーを背景に、形はものすごく単純には見えるけれども、実は奥深いところで割りと普遍的な神話性みたいなものを内包させているような作品です。実は、私は今回の調査でこの方に会っていないので、今後もっと詳しい、実はここが見どころであると言うようなことが情報として出れば、また紹介していきたいなと思います。しかし、いずれにしても単純にお化けのようなものが並んでいるのではなくて、その並びも、先ほど言ったような価値観を持ちながら展示をしていくというアーティストです。

これはヘンリック・ホーカンソンです。スウェーデンのアーティストです。この人とはベルリンで会いました。これは生きている木です。後ろにバケツのようなものが見えていますが、それぞれ木の後ろのほうに水をドリップさせて、会期中にずっと育成していきます。倒れてはいますが間違いなく成長し続けていく作品です。これは《Fallen Forest》といって、森が倒れている状態ということです。これも、実は地震があって以降、まさにこういう風景が、どうしても、特に山間部などの震災を想起させてしまうのでどうしようかという話が実はありました。ただ、これらの木が間違いなく生育していくというか、いろいろな環境、これは人間が勝手にこういうふうに言っているということが言えるかもしれませんが、逆に言えば、たくましく育っていくことに何かメッセージをこめていければいいのではないかという事で、そのアーティストと話をし、これを展示しようと進めています。自身もどういう木を選ぼうかということで、5月に来日をする予定になっています。

今のところ私が会ったアーティストで誰一人として、放射能で大変なことになっているので行きたくないという人はいませんでした。むしろ積極的に、いつ行ったらいいのかということを書いてもらえて、非常に嬉しかったです。それから残念ながら他の展覧会、われわれのほうで後でリクエストしたものですから、どうしても

その時期が合わないで来られない人も、作品を出すことについては快諾してくれたりしました。非常にありがたいなと思っています。本当にそういう意味では、われわれの想像する以上に、今回のことは世界中の人が見守っているということがよくわかりました。もちろん争点は原発です。ですから、これはこれで少し話がややこしくなります。例えばフランスには行きませんでしたけれど、やはりドイツはどうしてもこの原発について、当初から報道がものすごく熱くされていましたし、ドイツのアーティストも意識が高く、非常に象徴的でした。自然災害でもって悲劇が起きた以上のことが、これだけ世界中から注目されているということが、感じることができました。それでなおかつ非常に積極的に参加を同意してもらっているというのも、このトリエンナーレが非常に意義深いものとして理解されているのだと思います。ありがたいなと思っています。

これはチラシにも先ほどのヘンリック・ホーカンソンの作品と同じように載っています、クリスチャン・マークレーの《The Clock》という作品です。これは、実は私はソウルで見ることができたのですが、24時間、分単位の時間を示している映画のシーンを全部とってきています。これは映画好きの人が見たらたまらないのですが、どの映画か当てるだけでも楽しいです。私もいくつか知っているのがあって、日本の映画も出てきます。それが次々に様々な映画によって24時間が示されていきます。実はこれを全部見ようと思ったら、24時間かかります。それで、おそらく会期中に毎日ではできないので、どこかにセットして24時間徹夜で見る、ということになるかなと思います。大変といえば大変です。映画が全く興味ない人はひよっとしたら面白くないかもしれません。それは話だけ聞いていて単純に聞こえますが、映画の文脈のシーンとこの24時間という時間の流れのシーンが非常にうまく絡まって、私自身はほとんど見飽きることがないぐらいずっと見ていたい作品でした。

クリスチャン・マークレーもすでに来日して、実際に会いましたが、われわれとしても、本人としてもこの作品をとということで、決まった作品です。

それからこれは、ジェイムス・リー・バイヤースという、物故作家の作品になります。この調査は、やや時期をずれてニューヨークに行った人たちとヨーロッパとに分かれたのですが、直接これについては調査をしていません。ジェイムス・リー・バイヤースの、ある種再演になるかもしれません。パフォーマンスをする人、つまり会場に物が置いてあるだけではなくて、そこに何らかの形でパフォーマンスが行なわれていく、ということぐらいに留めておきますが、ある種劇場的な作品になると思います。これは毎日行なわれますが、まさにその場に行って、その場の雰囲気、つまり物としての作品を見るだけではなく、雰囲気そのものも同時に体験をしていただく作品になるかと思います。

これはカールステン・ニコライの《auto R》(オート・エル)です。ドイツ語で言うとRは「エル」になるので《オート・エル》。これはこのようなユニットを参加者自身が貼って行って作っていくという、ある種の特定の、複数で面を覆うことで、何かしらのオーガニックな何物かができていくという作品です。カールステン・ニコライは、実はこの作品以外にも出品作品を予定しています。ドイツの作家です。

これはシガリット・ランダウというイスラエルの作家です。私はどこかで最近少し書いたのですが、今のアーティストというのは、エスノグラファーと言われています。エスノグラファーというのは民族史学者のようなものです。つまり、美術の昔の主題は歴史であったり宗教であったり、それから神話であったりしました。今のアーティストは、もちろんそういうものもベースにはしていますが、世界中のみんなが共有できるような、

例えば性の問題とか民族の問題とか、当然戦争もそうです。本来アーティストが抱えるような問題ではないものだけれど、20世紀以降のアーティストは否応なくそういうものを抱えざるを得ない。特にその中東、イスラエルにしてもパレスチナにしても、非常に興味深いアーティストが増えてきました。それで、このシンガリット・ランダウの作品も、これは映像の作品ですが、スイカがずっとひっぱられていて、ずっとくるくる回りながら、最後にはなくなっていくという作品です。死海とはデッド・シーのことです。死海で実際に作家自身がパフォーマンスをして作った作品です。死海というのは、30分以上浮かんでいると浸透圧で人間の水分が取られてしまいます。ですから、2時間くらい浸かっていると、そのまま全部なくなって、多分死んでしまいます。ものすごく塩分の濃度が多いので浮かぶわけです。溺れることはありませんが、長時間浮かんでいると、自分の水分がなくなって死んでしまいます。

そういう、身体的な痛みというようなもの、それは単に自然のなかだけではなくて、身体的な痛みのようなものを、民族的にかかえている歴史のようなものを表象化していく作家が多いです。そうすると、少しでもそのような事情について知っているほうが作品を見るときに役に立つこともあるかもしれません。そういう意味では、昔の歴史とか神話とかという話をしましたが、歴史も神話も知らなくて作品を見ると、ちんぷんかんぷんになるのと同じように、そもそも死海とはということではなく、死海とはどこにあってどんなものだろうということをやっと調べたりすると、その現代美術の解釈に作品が少しは役に立たない感じがします。つまりそのようなものにアーティストが、あらゆるものに、人間にとって存在を脅かすものとか、本質的な存在について、いろいろなテーマについて目配りをしているわけなので、われわれもその目配りについていかななくてはならないということが、一方であります。

これはベトナムのジュン・グエン＝ハツシバの作品です。これは、このスキンヘッドになっているのが本人です。街を走るのですが、走った痕跡がドローイングになって一つの作品が出来上がるという作品です。これはいろいろな都市の中で、その都市に直接関係あるようなものもありますし、作家自身の個人的な記憶のようなものもあります。いずれにしても人々が走って、その痕跡はグーグル・マップなどでもすぐできますが、その痕跡を映像として走っている姿も出しますが、それによってドローイングを作る、平面の作品も作るプロジェクトでやろうとしています。

これは孫遜です。孫遜は去年 YCC でレジデンスをした中国の若いアーティストです。その後に、ヴェニス映像祭で賞を取りました。その意味では、横浜に非常になじみのあるアーティストでもあります。

それから泉太郎の作品です。これも、昨年神奈川県民ホールで個展をしたアーティストです。

これが田口和奈の作品です。実はこれはしっかり見てないので言えないのですが、これは写真らしいです。写真を使った作品はずいぶんいろいろな作家がいますが、直接プリントでシャッターを押して、その対象をプリント化するという作品でないことは間違いない。つまりメディアとして、その写真という手段を使いますが、結果的には絵画として表現をするというふうに使っているアーティストです。

今日はこと細かく一人ずつ作家の作品を解説していこうということではなくて、冒頭話したような意図がここにはこもっていますので、現代美術のアーティストというのはいろいろな方向からいろいろな自分の表現をしますので、それをいろいろな形で調べるのも面白いし、わからなければアーティストが来たときに聞いてみるというのも私はあると思います。そういう形で、来られた方にそれを伝えていくことをプログラム化します。

そういうものに是非参加をしてみようという方にとっては非常に有意義なプログラムになるのではないかと
思っています。具体的にどういふプログラムになるかというの、これからわれわれの方もどういふふうにし
てこれを皆さんと一緒に組み立てていくかを考えていかななくてはいけません。残り3ヶ月あるかないかですが、
会期中も、当然作品が展示された後も、それが実際一番いい勉強の場なのでそのような場も使いながらやっ
ていこうと思っていますので、よろしくお願ひいたします。